

銘木市に見られる北海道産広葉樹材

(7) キハダ

道総研林産試験場 佐藤 真由美



山の中を歩いていると時おり見かける、結構立派な大木になるキハダですが、ハイキング好きの一般市民でもはっきり認識している人は少ないようです。木材としての知名度も、消費者の間ではいま一つといったところでしょうか。却って、鮮やかな黄色の内樹皮が胃薬「ガラニスケ（ベラスケとも）」になると言えば話が通じる人がいます。最近、自然志向で草木染めを手掛ける人にも出会いますが、キハダの内樹皮は染料として奈良時代からの歴史があるそうで、防虫効果もあるとされ、和服を扱う方々はご存じのかたが多いです。いずれにしても、筆者宅でお茶菓子を載せた小皿をキハダ材と紹介すると「きれいな木なんですね！」と驚かれます。

道内に自生する高木の中では唯一のミカン科樹種で、アイヌの人々は、その実を食用にしています。栄養源というよりは風味付けとして料理に混ぜる使い方、同じミカン科のサンショウの実のような強い辛みは無く、明らかにシトラス系の香りがします。植物図鑑などでは、道内に生育するものは変種ヒロハノキハダとされていますが、樹木の外観にも木材にも際立った違いはありません。本編では、植物分類上の細かい話は扱いませんので、キハダという呼称で通します。

1989年9月の銘木市では、キハダの出品は本数で全体の5%、材積は3.2%を占めていましたが、同じ9月で比べると、2021年では本数で0.4%、材積で0.5%となり、直近の2022年1月の市では、本数で0.8%、材積では0.6%と、往年に比べシェアは下がってきています。銘木市に出展される数量はさほど多くはありませんが、コンスタントに登場する樹種でもあり、素性の良い原木だと、かなりの高値がつくこともあります（写真1）。銘木市に並ぶのは、収穫された中でも品質の良さそうな原木が中心なので、実際にはもうちょっと多くの原木が木材工場には運び込まれているのですが、山で見かける頻度から考えても、決して大量にさばける樹種ではなく、工業原料としては工夫を要すると言えます。それこそが「銘木」とも言えるのかも知れません。

木材の用途を考える時、物理的性質をまず確認する

のがお定まりの手順です。キハダの材は気乾密度が平均 0.49g/cm^3 、ミズナラ材の 0.68g/cm^3 やウダイカンバ材の 0.67g/cm^3 に比べるとやや低く、これに伴い曲げヤング係数や圧縮強さといった強度性能の値も若干低めとなっています。密度は針葉樹のカラマツ材に近く、曲げヤング係数などはトドマツ材クラスで、密度の割に衝撃曲げ吸収エネルギーの値が低い、つまり、もろいのが特徴的です¹⁾。とはいえ、スキー板や野球のバット、あるいは土木工事現場で使われるかけやの柄などといった高度な強じんさを求められる用途でもなければ、大抵の広葉樹材は一般的な用途での強度的要求はクリアすると思います。そもそも、強ければいいというものでもありません。木材の強度性能は概ね



写真1 キハダ原木（2022年1月）

密度に比例しますので、強い材は重いのです。また、含水率による収縮膨潤といった寸法変化の大きさも概ね密度に比例しますので、重い材は変形しやすい傾向があります。体格がコンパクトで、狭い国土にこぢんまりと暮らしてきた日本人には、日常手に取るものは軽いもの、また、湿度変化の大きい気候の下で建具は狂いのないものが求められ、強じんな材でなくても使い道はいくらでもあるのです。本州のケヤキやクワといった銘木の代替材とされたこともあり、小ロットで室内壁材にするなど、装飾的な用途に適していると考えられます。林産試験場に寄せられた相談の中に、ファミリーレストランでステーキ皿を載せる木製敷板をタモ材で作ったところ、「重い」とクレームが出たというものがあり、タモ材よりも若干軽いキハダ材を紹介したことがありました²⁾。「ものは使いよう」と言いますが、数量は限られても特徴を發揮できる用途を与えることができれば、北海道の森林の潜在力を存分に活用できると考えます。

近年のキハダ材の用途として、まず思いつくのは室内用ドアではないでしょうか。洋風の住宅が一般的となっているなか、玄関廊下から居間へと開く重厚そうな木製扉はなかなか威厳が備わっていて、家の格も高く感じられそうです。今どき室内ドアを一枚板で作ることはほとんどなく、木製の枠の内部にボール紙のハニカム等をはめ込み、表板で挟んだフラッシュ構造のドアが多くなっています。これが例えば厚さ45mm×幅750mm×長さ2000mmのナラの板とすると重さは約45kgとなり、製造・輸送・施工時の取り回しも大変、取り付けかまちやヒンジも相当頑丈なものにしないとイケませんし、ドアの開閉にも力が必要になります。フラッシュドアと言うと、中身の無い安物というイメージを持たれがちですが、材料を節約して、操作性も良くなる、ただの安普請(やすぶしん)ではない優れた技術です。そこに木材らしい美観を添えているのがキハダ材です。キハダ材の外観の特徴は、他に類を見ない緑を帯びた黄褐色の心材と、環孔材ゆえのはっきりした木目、そして艶(つや)と言えるでしょう。木材表面の光沢を数値化して評価することは難しいのですが、例えばイタヤ材の柔らかな絹のような光沢に対して、キハダ材は蒔絵の金粉に似た「照り」があると筆者は思います(注:賛否両論を頂いています)。

キハダの原木は銘木市の広い展示会場でも、フレッシュなものなら木口内樹皮の鮮黄色がよく目立ちます。キハダ原木は辺材が薄いものが多く、ナラの辺材

は20年輪ほどが数えられますが、キハダの辺材は10年輪前後です(写真2)。年輪幅が比較的揃っていることも、木材を扱う者にとってはありがたいと思います。キハダは日陰が苦手な陽樹とされていますが、種子散布は鳥依存なので、鳥が羽を休める枝がないと種子が地面に落ちません。風で種子を散らすカバ類のように裸地でやんちゃに成長するのではなく、大きな木の脇で木漏れ日を浴びながらじわじわと生き延びるタイプなのかも知れません。また、キハダは夏の野山で多く見かける大型の蝶、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハの主な食草と考えられます。常々、見かけるキハダの数に比べてミヤマカラスアゲハの数は多過ぎるのではないかと思っています。筆者宅の鉢植えのサンショウを一日で丸裸にするナミアゲハの幼虫の食性から見て、年輪幅が狭いキハダはアゲハたちに好まれる立地にあつたのではないか?はたまた、筆者からは見えない木々の狭間でキハダはいっぱい育っているのか?と、原木を前にして森林の営みに思いをはせる筆者です。

■参考文献

- 1) (公社)日本木材加工技術協会編:「日本の木材」、東京、(1989)。
- 2) 佐藤真由美:林産試だより、2007年4月号(2007)。



写真2 辺材の薄いキハダ原木(2022年1月)